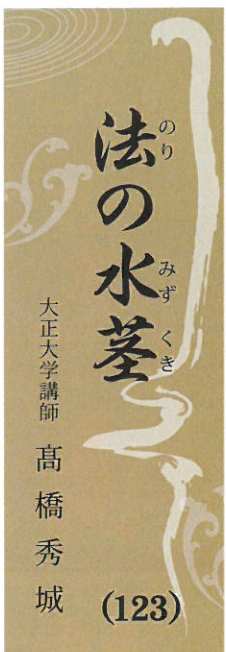


令和4年9月号

高尾山報



高尾山「灯りの巡礼」柴燈大護摩供厳修



大正大学講師 高橋秀城

法のり水荖

(123)

今年の九月一日は「二百十日」。立春から数えて、ちょうど二百十日目です。田んぼの稲穂が黄金色に色づき収穫が待ち遠しい頃でもありますが、この時期は日本列島に台風が接近して、大きな被害をもたらすこともよくあります。風が荒れないように祈る「風祭」という農耕儀礼も全国で行われますが、農作物への影響がないことを祈りつつ、穏やかに豊かな実りの秋を待ち望みます。

野分する

野辺のけしきを
見る時は
心なき人

あらじとぞ思ふ

（『千載集』藤原季通）
強風が草木を揺さぶる野辺の様子を眺めるときは、心に響くものがあつて、何も情趣を感じない人は

九月も下旬になれば、秋のお彼岸が巡つてきます。秋分の日を中心とした一週間（今年は二十日から二十六日）は、日頃はなかなか身近に感じられないご先祖さまを想い、お墓参りをして手を合わせます。

生死の

二つの海を
厭はしみ

潮千の山を
徳ひつるかも

（『万葉集』
よみ人しらす）

（生と死の二つの海から遠ざかりたいので、潮の満ち引きのない山を思い慕うよ）

この歌にある「生死の二つの海」は、仏教語「苦海」を表したもので、生まれてから死ぬまでの間に、たくさん苦悩が海のように続いている人間世界をたとえています。こうした私たちが生きていくこの世は「此岸」（こちらの岸）と言われています。それに対して「潮千の



稲穂が色づき実りの秋が訪れる

お彼岸の時期は、少しだけ干潟の先へと思いを馳せてみてはいかがでしょう。彼岸の山からこの世の海を眺めれば、野分の次の日のように、これまでとは違った輝く

就任挨拶



この度、高尾山主・佐藤秀仁貫首の御下命により、令和四年八月一日付をもちまして執事長の重責を拝命いたしました。

私は昭和五十六年に先々代山本秀順貫首の下で出家をし、平成七年には先代大山隆玄貫首にお許しを頂き弟子として高尾山薬王院に入寺いたしました。爾来事務専一で奉職して参りましたが、時代が令和となり当代第三十三世佐藤秀仁貫首の御晋山を間近でお手伝いさせていただき、奇しくも三代に亘り高尾山主にお仕えることと相

執事長 犬山 秀康

成りました。

しかしながら、これまでと違い執事長就任の御下命には思いもよらず、自らの浅学非才はもとより余りにも器量乏しき故に固辞申し上げましたが、度度の佐藤貫首の身に余るお言葉と、先代大山前貫首のお言葉もあり、分不相応を重々承知の上で、大任を拝受した次第であります。このうえは微力乍らあらたに研鑽を積み、佐藤貫首のもとで高尾山薬王院を更に発展させるべく努力をする所存で御座いますので、今後とも何卒格段の御指導と御支援を賜りますようお願いを申し上げます。

御信徒の皆様方には、ご本尊飯縄大権現様の御加護により一層の御健勝御多幸をお祈り申し上げ就任の挨拶とさせていただきます。

命のさざ波が見渡せるかも
もしれません。

さて、こうした生死の

苦海を渡られた方の中に、真言宗を開かれた弘法大師空海（七七四〜八三五）がいらつしやいます。先月号では『今昔物語集』の空海伝から、幼少期から「神童」と呼ばれ、さまざまな書物（漢籍）に親しまれてきたお姿を垣間見ました。その後は次のように続きます。

十八歳になった時、この子は心に決めました。「私がこれまで学んできた俗典（仏教以外の書籍）には何の益もない。一生が終わってみれば、きつとむなしなものだ。これからは仏の道を学ぼう」と。

そこで、さまざまな地をめぐり歩いて苦行を修し、奇瑞をあらわしました。阿波国（今の徳島県）にある大滝嶽で虚空蔵の法を行くと、大きな剣が飛んできました。土佐国（今の高知県）の室生門（室戸岬）で求聞持の

行を観念していると、明星（金星）が口に入りました。またある時は、伊豆国（現在の静岡県伊豆半島と東京都伊豆諸島）の桂谷の山寺（修善寺）で空に向かつて『大般若経』の「魔事品」を書くと、経文の文字が虚空にはつきりと現れたのでした。

延暦十二年（七九三）、二十歳の時に髪を剃り十戒（十条の戒律）を授けられ「教海」と名乗りま

す。その後、自ら名を改めて「如空」とし、さらに延暦十四年（七九五）、二十二歳の時に東大寺の戒壇で具足戒（僧侶が守るべき戒律）を受け、名を「空海」と改めたのでした。

（『今昔物語集』など）
あらゆる書物に目を通した空海は、いよいよ山林修行の仏の道へと分け入りしました。虚空蔵求聞持法という記憶力を増大するための修法を究めながら、数多の不思議な現象を目の当たりにし

ています。室戸岬での、谷響きを惜しまず、明星来影す。

（空海『三教指帰』）
谷がこだまを返すように、（虚空蔵菩薩の）明星がお姿を現してくれた）
という名言も、苦行の先の深い境地から紡ぎ出されたものでしょう。

名前を「教海」から「如空」、そしてその両方を併せ持った「空海」と改めて仏門に入った時、仏様の御前で次のような言葉を口にしました。

我れ速疾に
仏になるべき
教を知らむ。

（『今昔物語集』）
私は速やかに仏になることのできる教えを知りたいのです）

真つ直ぐな求道心を打ち明けた、若き日のお大師さま。生涯にわたって駆け抜けた真言密教の道に先には、この願いが叶えられた世界が、果てしなく広がっているのを感じよう。

（栃木北部教区普濟寺）

高尾山、こども山伏 修行体験会

八月七日(日)、高尾山子供やまぶし修行体験会が、感染症予防対策を行いながら、約二十名の子供の参加をもって開催されました。

山麓の不動院で保護者達に見送られ、山伏と共に琵琶滝水行道場を目指して出立。水行では滝に打たれながら、御本尊様とのお約束として山伏から問いかけられた、「お友達と仲良く出来ますか?」「好き嫌いせずにご飯を食べられますか?」という質問に元気よく、「はい!」と答えました。

その後猛暑の中、汗をかきながら険しい山道を練行して登り、薬王院に向かいました。到着後には大本坊にてカレーライスの昼食を頂きました。

昼食後には腕輪念珠の製作。出来上がった念珠は大きさ、色使いが様々で、自分だけのオリジナル腕輪念珠となりました。その後大本堂にて、佐藤貫首導師のもと厳修された御護摩修行で、腕輪念珠をお加持して頂きました。

不動院での閉会式では、代表者をご本尊・飯縄大権現様へ、本日の修行の成果を今後の生活に生かすことを約束する「誓いの言葉」を奉告。最後には、「保護者達の見守る中、修行を終えた証となる、「修了証」が授けられ、開会式の時はお互いに会話が少なく恥ずかしくていた様子でしたが、閉会後には修行会を通じて仲良くなった友人と別れを惜しみながら帰宅しました。



気合いを入れて滝行を修す

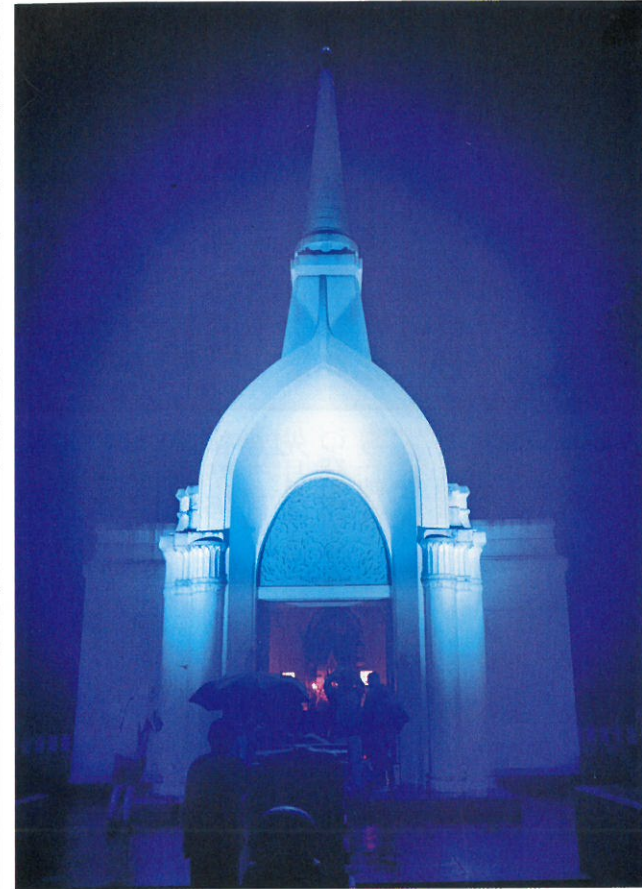


佐藤貫首と記念撮影



険しい山道を元気に練行

夕闇照らす人々の願い 高尾山ライトアップ「灯りの巡礼」



青く照らされる仏舎利塔

八月十七日から三十一日まで、八王子市の日本遺産「霊気満山 高尾山」の構成文化財をアピールするため、「高尾山」夏のライトアップイベントが行われ、浄心門や参道の春日燈籠、四天王門、大本堂等がライトアップされました。期間中は同様にライトアップされた天狗像の前で、訪れた大勢の参拝者に暗闇の中、辻説法が行われました。

八月二十日に行われた「灯りの巡礼」では、夕暮れ時の有喜苑において、佐藤貫首導師のもと柴燈大護摩供が厳修され、全国の医療従事者の無事を祈ると共に、仏舎利塔が「ブルーライトアップ」により青く照らしだされ、大勢の参列者と共に「コロナウイルス感染症が一刻も早く終息するよう、祈りを捧げました。

有喜苑の仏舎利塔には、御信徒様から御奉納頂きました、諸願成就の願いが込められた数多くの紙燈籠の光が、暗闇を照らしておりました。



天狗像前で辻説法する佐藤貫首



御信徒様より御奉納頂いた紙燈籠が並ぶ



夕闇照らす春日燈籠

観音菩薩の宗教

57

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

観音菩薩の転生者としての聖徳太子 と空海(3) (その20)

前号では、弘法大師・空海の遷化後まもなく成立したと考えられる『御遺告』に、大師は前世の功德をも相続して高僧となつたことを示唆する記述のあることを見た。その後、『神仙記』には太子が聖徳太子の化現である思想も現れた。

密教学者で声明家としても名を残した中川善教は、戦前のデータ検索などない時代に自ら膨大な文献を渉猟し、弘法大師の前世に関する思想や、大師が菩薩と尊崇された信仰をたどっていった(「弘法大師の本地と前身およびその後進」密教研究No.51、一九三三年)。今号ではその研究などにもとづき、空海が生前よ

り菩薩の位にあつたとされ、信仰を見てみたい。

大師は延暦二十二年(八〇四年)、遣唐使船への乗船を認められ唐に渡つた。同時に渡唐した最澄は留学僧、空海は高い学識を評価されながらも留学生という立場であつた。あ

えて現代風に換言すれば、留学僧は交換教授、留学生はまさに学生、両者の地位には大きな差があつた。しかし大師は唐に渡り、密教の大家であつた惠果阿闍梨に師事するや長足の進歩を遂げ、その成果を日本にもたらした。惠果の俗弟子であつた呉殷は、大師が三地の菩薩であると述べており、その所説は以下のように『御遺告』にも引用されて

いる。すなわち、「故呉殷纂曰、今有大日本國沙門來求聖教皆令所學可如瀉瓶。此沙門是非三地菩薩也内具大乘心外示小國沙門相云云」

前回同様、先学の書き下し文と現代語訳を掲げる。「故に呉殷が纂にいはく、今、大日本國の沙門あり、來りて聖教を求む。みな所學をせしめて瀉瓶の如くなるべし。この沙門は是れ凡徒にあらず、三地の菩薩なり。内には大乘の心を具し、外には小國沙門の相を示す云云」

「だから(惠果の俗弟子の)呉殷が書いた『大唐神都青龍寺東塔院灌頂國師惠果阿闍梨行狀』のなかには、『今、大日本國の沙門(出家修道者)が、(惠果のもとに)やつて来て仏の教えを求めた。師よりすべての法を学び、さながら一つの瓶の水を他の瓶へうつしかえて少しも漏らさないようであつた。この沙門はなみの沙門ではない、十地(最高

位の菩薩の十の修行段階)のうちの第三段階(「地」、発光地に位する菩薩である。内には大乘の心をそなえ、外見には小國の沙門の姿を示す云々」と記している(遠藤祐純「訳注・解説」『御遺告』弘法大師空海全集第八巻、筑摩書房、四六〇―四七頁)

すでに上記の現代語訳に注釈が含まれているので、これ以上の贅言を要しないが、少しく説明を加えよう。

三地とは、上の補足に見えるように菩薩の修行を十の階梯に分けたうちの三番目の発光地と呼ばれる位を指す。この位にいたると、あらゆることに耐え忍び、腹を立てずに心を動かさぬ境地(忍辱波羅蜜)に達し、その功德として身体から光を発するとされる。呉殷によれば、弘法大師は留学生として唐にいたつた時から通常の人間では達しえない菩薩の境地にあつたと評された。

中川善教は、呉殷の評が後世の諸文献では惠果自身が述べたことになつていくことを明らかにした。一例を挙げれば『高野大師行狀圖畫』第三「大師御入壇事」には以下のよう記されている。原文に続いて筆者の現代語訳を示す。

「されは唐土の呉殷か纂に云く。此沙門は是凡徒に非ず。三地の菩薩也。内には大乘の心を秘し外には小國の沙門の相を示すと。ほめたり。和尚も三地の菩薩なりとの給ひけるとかや」

「それゆえ唐の國の呉殷が編纂した書には、『この沙門(すなわち弘法大師)は普通の人ではない。三地の菩薩である。内面には大乘(仏教)の心を秘め、外見は小國の沙門の姿を示している』と褒めた。(惠果)和尚も『弘法大師は(三地)の菩薩である』などとおっしゃつたということだ」



空海の唐における師であつた惠果阿闍梨。『真言八祖像』「惠果」より。奈良国立博物館蔵。鎌倉時代。出典：ColBase (https://colbase.nich.go.jp/collection_items/narahaku/797-7?locale=ja)

ことである。さらに『高野大師行狀圖畫』第四「大師上宮御廟恭詣事」には、大師みづから第三地を證得したと述べたと記述されるようになる(中川前掲論文)。

「我今まのあたり見佛聞法のちからによつて。第三發光地を證すとその給ひし。大師を三地の菩薩と申事。唐朝にても有けれども。ミつからの給ひける事は此時成けり」

(八一〇)年に河内の叡福寺にある聖徳太子の御廟を参詣したおりのことである。その時、救世観音が現れ、その力によつて大師は第三發光地を證したと自ら述べている。前後が逆になるが上記引用文に先立つ文章を以下に引用し、続いて筆者の現代語訳を掲げよう。

「廟の前にて。懇に法施し給ひしに。いと夜更て後。大般若の理趣分を誦する者有。其聲たへなる事はむかたなし。大師祈念しての給はく。此微妙の聲は。誰人のなす處そや。願くハ我に示し給へとありしかは。廟窟の前に光明を現しつ。光りの中に聲有て云く。我は救世観音の垂迹也。衆生を利せんために。安養世界を捨て。此穢土に來る。我母后は。本師彌陀如來の化身。我后は大勢至菩薩の垂迹なり。三尊契を結て。三骨を一廟に納む。守屋か邪見をくたき。佛法の威徳を顯し。四十六所に伽藍を立て。一千三百

餘人の僧尼を化度せり。断惡修善の道。漸くみちぬと示し。勝鬘等の大乘の要文を説給ひけれハ。大師殊に觀喜し給ひて。我今まのあたり見佛聞法のちからによつて。第三發光地を證すとそ。の給ひし」

「(叡福寺にある聖徳太子の)廟の前で(弘法大師が)心を込めて法要を営んでいらつしやると、真夜中になつて『大般若經』の「理趣分」を唱える者があつた。その声のすばらしいことは言葉にできないほどであつた。大師が祈念しておつしやることには、『この奥深く繊細な声は、いずれの人が出しているものであろうか、どうか私にお示しく下さい』と言つと、廟の洞窟の前に光明が現れ、その光の中から声がして次のように言つた。『私は救世観音が垂迹したものである。衆生を救うために(私が)界を捨て、この(衆生が住んでいる)穢土にやつ

てきた。私の母君は根本の師匠である阿彌陀仏の化身で、私の后は大勢至菩薩の化身である。(救世観音・阿彌陀仏・勢至菩薩)の三尊が契りを結んで、(ここに埋葬されている)聖徳太子と、その母たる穴穂部間人皇女と、その后たる膳部善美皇女(三人の遺骨を一箇所の廟に納めた。(聖徳太子は物部)守屋の(排仏)の邪見を砕き、佛法の威徳を明らかにし、四十六箇所に伽藍を建て、千三百人以上の僧尼を出家させた。惡を断ち善を修める道がようやく満ちたことを(太子は世に)示し、『勝鬘經』などの大乘(仏教)の重要な文言を注釈なされたので、(弘法)大師は特別にお喜びになつて、『私はいま、まのあたりに仏様を見て、仏法を聞く力によつて、第三の發光地を体得した』とおっしゃつた」

解説が必要であるが、紙幅が尽きたので続きは次号に譲らう。

今回は生花新風体の作品を紹介いたします。生花新風体は三種の花材で生ける花形です。完成したときの形よりも、生けようとした時に植物から受ける感動をそのまま表現することを目標にします。

この作品は行李柳、レリア、オクロレウカの三種類を使用しています。私がこの時に一番心惹かれた花材は行李柳でした。細い枝の先に残る小さく柔らかい葉に強い感動を受けました。綺麗な花や大きい花が持つ美しさは素晴らしいものです。一方で小さい葉、枯れゆく枝から生命感を感じてそれを表現できる、という事もいけばなを生ける上で非常に楽しいことです。葉が繁る夏も終わりに近づく中



花材：行李柳・レリア・オクロレウカ

いけばなの心 ③①

華道教授 佐藤 宗明

で、懸命に葉をつける行李柳の生命感にレリアの花を合わせる事で彩りを添えました。また黄葉したオクロレウカで秋に向かう季節感を表現しました。



今回使用した三種の花材は自然の中では同じ場所に生えてくる事はありません。自然界では出会うことのない花材を取り合わせて作品を生けていく事ができる事もいけばなの特徴の一つです。

高尾山物語 53

大師堂



絵・橋本豊治

高尾山四国八十八大師御砂踏霊場
 大師堂周囲は大師像が並ぶ四国八十八大師御砂踏み霊場となっています。各大師像の下には四国八十八カ所霊場の各寺院から頂いた御砂が納められています。その御砂を踏みながら巡拝していきます。

大本堂脇には諸堂が林立しており、その二つに弘法大師(空海)を祀る大師堂があります。このお堂は明治時代中頃までは「大日堂」と呼ばれておりました。建築様式から、十七世紀後半に建立されたお堂とされています。

絵図によると、かつては現在の大本堂の位置に薬師堂(現存せず)、護摩堂(現在の奥之院不動堂)と三棟が並んでおりました。大師堂には後世に修築した形式がありますが、奥之院不動堂とよく似た造りです。当時は茅葺屋根でしたが、現在は銅板瓦葺きとなっています。

お祀りされていたのはお堂の名前から大日如来と想定されており、現在大本堂に安置されています。胎藏界・金剛界二体の大日如来像のうち、十七世紀後半の作と推定される、金剛界木造大日如来坐像がお祀りされていた可能性が指摘されております。



僧侶となる誓いを立てる得度者

得度式厳修

八月二日

八月一日、早朝の高尾山大本堂に於いて、佐藤貫首戒師のもと、仏門に入り僧侶となるための得度式が執り行われました。

得度者は、佐藤秀仁貫首法資・佐藤秀峻さん(十一歳)です。新たに仏門に入られた新発意の、今後の様々な修行での精進を願うものであります。

いろは

天狗の落とし文 ②①

練り直すこと

常に大切

今の自分を

省みる



何事も最初の計画通りに物事が進むとは限りません。どんなに備えをしても、事前に様々な状況を予測していたとしても、不測の事態の発生を防ぐことはとても難しいものです。

不測の事態に臨機応変に立ち回ることが理想です。それでも、危機の時にはすべに思考を柔軟に更新できないことが多いものです。

大事なことは、いざ直面した時に備えて、目標の優先順位の設定、つまり何を達成することが一番大事な目的なのかということに常に意識しておくことだと考えております。

そのためにも、日頃から自分の行いを振り返って反省し、自分の目標を明確にしていると、自然とより良い選択が見えてくることとなります。

高尾山年代記

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館 外山 徹

33

十六世秀憲1 飯縄宮の建立



宝暦・文化の改修を経て今日に伝わる飯縄権現堂

享保九年（二七二五）四月、秀憲が高尾山中興第一六世を継いだ。数え三五歳の若き山主の誕生であった。この秀憲こそは江戸中期に信仰面が高尾山を興隆にみちびく一代の傑物である。

飯縄宮の建立

秀憲の晋山から二年半が経った享保二年十二月一日。新暦ならば十二月の上旬頃である。その日、高尾山最寄りの上栲田村旧家の日記には、**この日高尾山に名主・組頭衆へ振る舞いあり**と記された。村の主だった者たちが呼び集められ、馳走を振舞われた理由は、同月二四日の記事で明らかになる。

大光寺にて高尾より栲田中酒振る舞われ申しそうろう、飯縄様御宮建立なり

大光寺（八王子市初沢町）は日記の主の居住地近在の門末寺院である。ここで、村人に対し飯縄宮の建立が披露され、酒

が供されたというのは、一大事業を立ち上げる意思表明であり、村役人を事前に集めた周到さなどから推測すると、単なる披露ではなく、その実施にあたり地先村に対し大々的な協力を求めたというものである。

さて、現在、御本社と呼ばれ、山内でも中心的な祭祀施設となっている飯縄大権現を祀る社殿は、享保二年の再建発願以前にはどのような状況にあったのだろうか。「飯綱（繩）」の史料上の初見は寛永八年（二六三二）の梵鐘勧進の案文で、「そもそもこの山は」「医王の垂跡、愛宕・飯綱鎮護修むるなり」と記されている。戦国時代にはすでに確認できる薬師如来に

加え、飯縄大権現が祭祀されてきたことがわかり、同じく一四年付の文書にも「飯縄・薬師堂宮」「いつなの宮」という文言があるので、独立した社殿に祭祀されていたことが確定できる。さらに、

慶安二年（二六四九）ないし三年の成立とされる郷村高帳の多摩郡上栲田村の項には「高七拾五石高尾山飯綱社領」と書かれている。この七五石は慶安元年に三代將軍家光から安堵された寺領朱印地と同一のもののだが、高尾山に祀られている神仏が飯縄大権現であると認知されていたことを示している。ただし、この時期の飯縄宮がどこにあったか、どのくらいの規模であったかについては全く知る術はない。

さて、その時、秀憲はなぜ飯縄宮の建立を思い立ったのだろうか。秀憲の意識を慮るうえで興味深い記事がある。それは、後の寛延三年（二七五〇）に作成される高尾山縁起の文面である。そこには、飯縄大権現の祭祀について述べた二文がある。**秀秀以来ただ承けて醍醐の法を守り、ともに医王を尊崇するのみ。飯縄の法を伝うといえどもあえてその業にと**

どめず。歳時、祭りにその物を以ってし、また敬してこれを遠ざかる。

すなわち、一〇世秀秀の来山からは、本尊として医王・薬師如来を祭るばかりで、表立って飯縄大権現を祭祀しなくなったということである。しかし、実際には秀秀が在住した寛永期こそ、飯縄宮が史料上に確認できる時代であり、秀秀以降に飯縄信仰が低調になったとも言えない。それでは、秀憲の「秀秀以来」という認識はどこから来るのだろうか。享保三年（二七二八）の幕府鷹匠らによる放生会の際には、鷹を放つ場所として「神前」があり、翌年四月の祭儀の記事には「本社」とあるので、この時期に飯縄宮が存続していたことは明らかである。それでも、秀憲としては飯縄大権現こそが高尾山の主たる祭神であり、その祭祀を重視する意識が強くあったのだろう。

享保一四年十月八日の日記の記事。

この日より三日の内、高尾山棟上げ祝い、村々呼ばれそうろう

建立の披露から三年弱棟上げまでの工期を考えると、この間の年月の経過には勧進等の資金集めの努力が推測される。日記にも高尾山へ作業に出た記述があるが、村人を招いての上棟祝いは高尾山の山容整備が地域と一体になって進められたことを示している。

享保一六年二月から始まる開帳は、飯縄宮の落慶を主旨とするものだろうから、上棟の後、工期は翌享保一五年にわたったものと考えられる。小町和義氏は、その享保一五年までに幣殿・拝殿が併設されたとしている。御本社は棟の建物のように見えるが、実際には、手前から拜殿、幣殿があつて最奥に本殿の三棟が連結した「権現造り」という形式をとっている。棟札に見える宝暦三年

（二七五三）、文化元年（二八〇四）・二年の修築を経て、江戸後期には紀行文や地誌に「本社飯縄大権現の宮有り、大社にしてもつとも壮麗なり」「神威赫々と顕われ実に輪奐たる様の社頭なり」と特筆される威容を備えることになった。今日幸いにもわれわれはその同じ社頭を振り仰ぐことができるのである。

飯縄大権現の祭祀

さて、秀憲が祭祀を念願した飯縄大権現とはいかなる神か？高尾山縁起は、醍醐寺から下向した中興一世俊源の夢中に、飯縄大権現の姿に変わった阿遮羅明王（不動明王）が現われ、悪魔・悪霊の跳梁する濁世ゆえ、本来の不動ではなく、異形の神の姿に変わって示現したことを告げたとしている。鳥を思わせる鋭いくちばしを備えた面貌、不動明王の体躯に大きな翼、手足にはへびが絡み、白狐の上に屹立する。その御

影は、不動明王、迦楼羅天、荼枳尼天、歡喜天、宇賀弁財天の五相合体の姿とされている。この一見恐ろしいが御影からは、自然崇拜の素朴なあり方を思い浮かべることができ。迦楼羅天は鳥の姿であり、キツネは稲荷（茶枳尼天）の神使とされている。実際には眼には見えない神仏の存在を、人々は鳥獣を神仏の化身や神使になぞらえて実感したのだろう。山中に分け入った際、瞬時に現れては消え去る鳥やキツネ、へびの姿を目撃した一利那、人々は神の存在をそこに感じたのではないか。

津久井地方（神奈川県相模原市緑区）にある門末の普門寺が飯縄宮を祭祀しているが、乾賢太郎氏は八王子市下恩方町、同犬目町、日野市日野本町、横浜市緑区長津田町と、関東南西部の山沿いに分布する飯縄社の来歴等を調査している。この方面への飯縄社の分

布は、真上隆俊師が言及した室町中期の中興期における、末寺圏のある相模平野から津久井方面を経由して高尾山へ北上する教線拡張の動向にも沿い、薄ぼんやりとしたものながら、飯縄信仰と高尾山中興との関わりを意識させる。秀憲による飯縄大権現への崇敬は、江戸前期に醍醐寺から下向した秀秀が高尾山を再興する以前の、おぼろげに地域に伝わる中世の信仰への追憶が背景にあつたのかもしれない。《参考文献》小町和義「高尾山の建築について」、真上隆俊「高尾山の歴史―薬王院の門末とその住僧―」（以上、『多摩文化第二四号武州高尾山―その自然と歴史―一九七四）、乾賢太郎「地域社会における飯縄信仰の展開」（『八王子市史研究』創刊号、二〇二二）

おことわり 本連載では史料の引用について、適宜読みやすく原文に手を加えています。

恩師・菊地正先生に学ぶ(4)
 創作書おろし
とんとん地藏尊
 とんとん地藏尊会
 とんとん健康散歩の会
 会長 石井忠明

とんとんむかし、実はそんなに昔ではないのだが、高尾山の裾野。参道(二号路)入り口の不動院前に、いつもニコッと迎えてくれる優しいお顔の「とんとん地藏尊」がお立ちになっているのをご存じかな。

ある冬のことだった。寒い季節にも拘わらず、信者さんや山へ登る人達で賑わっていた。でもなあ、地藏尊の前で手を合わせる人がほとんどいなくなつたと。そして辺りは暗くなり、何時しか雪が降りだして、山は白くなつて静まり帰つたと。地藏尊様はなあ、寒さと切なさで急に泣き出してしまつたと。するとなあ、後のカラスの犬天狗となる、カラスのカン助が闇

の梢からスーッと降りてきて涙を聞いたと。

「地藏様！どうした！そんなに悲しい顔をして、何かあつたかえ！」地藏尊様はカン助に、隣の六根様には手を合わせているのに、自分に手を合わせてくれる人間様がいないことなどを一部始終話したと。話を聞いたカン助は、

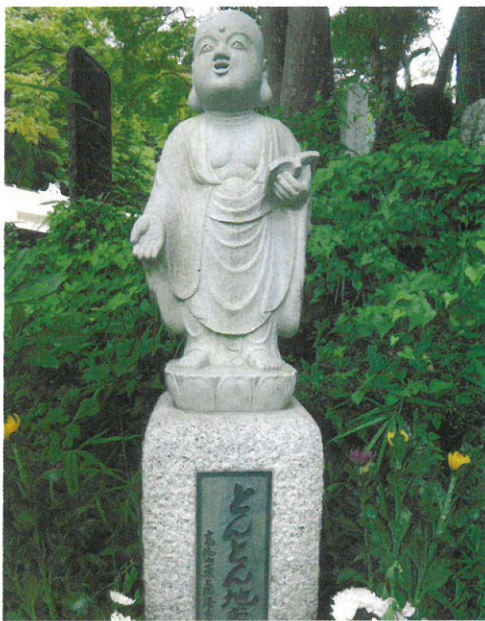
「今夜の丑三ツ(午前二時から二時半)まで待つてくれ！」
 と言って姿を消したと。そして人間様が寝入つたその時がやつてきた。するとなあ、子(鼠)、丑(牛)、寅(虎)、卯(兎)、辰(龍)、巳(蛇)、午(馬)、未(羊)、申(猿)、酉(鳥)、戌(犬)、亥(猪)の十二支の動物達が集まつて

来た。

カン助はなあ、集まつてくれた皆に礼を言い、さらにお願いを云つたと。「頼む！これから暫くの間、人間様に化けてくりやれ、そして朝は地藏尊様の前で、お早うございませ、と声を出し、今日一日楽しく安全でありますようにと手を合わせ、拜んでくだせえ！そんな帰りには帰りで無事戻りましたと声を出し、手を合わせて拜んでくれ、頼む！」

すると皆は、「判つた、皆で協力しましょう」と言つて闇の中へ消えていったと。

翌朝、夜が明けてくると早くも高尾山に登る登山者が増え、その中には人間に化けた動物達が地藏尊の前で手を合わせ、拜んでいるではねえか。そして安心安全をお願いする、本当の人間様も次から次へと続いたと。丑三ツ時がまたやつてきた。カン助と十二支の



参道入口に立つとんとん地藏尊

動物達が、地藏尊の周りに集まり、協力し合つたことをお互いに喜び合つたと。そして何時しか、とんとん地藏尊が「とんとんお早ようお帰り地藏尊」と呼ばれるようになったと。

暫く時が経つた朝のことじゃつた。若い修行僧が、薬王院へ参拝するため参道を登りかけた時じゃつた。地藏尊の前で静かに合掌していると、「お早う、元気かね」と聞こえるではないか。「はて、今確かに声がしたような…」と思ひながら参道を進んで行つたと。

数日かかりの滝行を終えて、次の修行地に向かうために元来た道に差し掛かると、又「お帰り、有難う」と聞こえた。修行僧はこの地藏尊が世に知られた「とんとんお早うお帰り地藏尊でしたか」と感

激して旅立つて行つたと。このお話は説話です。恐らく合掌している時の会話だったのでしよう。高尾山にきましたら「とんとん地藏尊」に合掌してみませんか。

とんとんむかしはへえしまい

八十八大師巡拝記 虚往実帰の一日

町田市 八代 純子

高尾山に薫風が吹き始める頃、薬王院主催による「八十八大師巡拝」という行事が行われる。この行事は、高尾山内各所に点在する、四国八十八ヶ所寺院の御砂を納めた「お大師様(弘法大師)」の尊像を巡拝し、御縁を深めることを目的として、年に春秋の二回行われている。



山内各所のお大師様を巡拝する

行きは道中で、琵琶滝の不動堂、有喜苑の仏舎利塔で法楽をお唱えしながら薬王院を目指す。本年の五月十日、当日早朝まで、雨が降りだしそうな気配だったが、不動院を出立するころには、雨雲も退去する準備を始めていた。参加者は登山経験があまりない人から健脚な修験者まで様々。法螺貝を高らかに鳴らしながら、時折「慚愧懺悔 六根清浄」と掛念仏を唱えながら山に登るこの集団は、端からは修行者集団に見えたかもしれない。または、お大師様の前で合掌し、「南無大師遍照金剛」と唱える姿を見て、熱心な信徒

だと思われたかもしれない。しかし、いつのまにか初夏に相応しい晴天となつた空の下、鳥たちのさえずりを聞きながら、眩しい新緑の中を歩くうち、半ば遠足の雰囲気となつていった。そしてこの傾向は下山する時に顕著になつた。折り返し地点の薬王院では大師堂で法楽、本堂で護摩修行。精進料理を食べた後、金毘羅社に立ち寄つてから不動院に戻るのだが、精進料理で満腹になつた御機嫌の参加者達は、楽しくお喋りしながら山を下りる。もはや完全にハイキング集団と化していた。けれどこの巡拝はこのような雰囲気も許容する。どんな些細なきっかけもお大師様との結縁になり得る。だからお遍路さんになつた気分です歩くのもよし。精進料理が目当て、運動不足解消の為など、参加の動機はそれぞれ。不動院に戻ると献灯式でクライマックスを迎



不動院で行われる献灯式

えた。ある者は故人を思い、ある者は我が身を省みる。この時、不動院内は塵界から切り離され、神仏とお大師様と参加者と精霊が一体となる。まさに灯明と声明が作り出す法楽スペクタクル。終了後、成満饅頭を貰つて満足感に浸る。不動院の内と外で参加者達が語り合い、写真を撮り合い、先達に話かけ、いつまでも名残を惜しんでいた。

「今日は『虚往実帰』の一日だった。お大師様よりちよつとスケールは小さいけれど、不動院の前でそんなことを考えながら左を見た時、八十八番目のお大師様が少し笑つたような気がした。(了)」

註「虚往実帰」は、何の知識や経験ももたない者が、先生や師匠などから多くの教えを授けられることのとえ。

高尾山 季節散歩

暦の言葉 「七十二候」
蟄虫坏戸

「むしかくれてとをふさぐ」

九月二十八日〜十月二日頃

この時期になると虫が土に潜り、穴の入り口をふさぐようになるという意味です。

寒い季節が到来し、虫やカエル、へびなどが冬眠の準備を始めます。蛹になり冬を越す、木の根元や枯葉の中に潜むなど方法は様々です。

今月の風物詩
菊酒

菊酒は重陽の節句（九月九日）に、盃に菊の花びらを浮かべ、一夜漬けた酒の味とともに菊の香りを楽しむ方法です。

中国から渡ってきた習慣で、最も縁起の良い重陽の節句に、身体の中にある邪気を払い、不老長寿を願って飲んでいきたとされています。

健康登山者投稿作品

季節の絵手紙「自然に感謝」

八王子市 梶谷玲子 様



一步一步煩惱滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

九段 率直素直正直の道

「率直」とは自分の気持ちなどを飾ったり隠したりしないことです。「素直」とは考えや態度がまっすぐなことです。「正直」とは正しく素直で偽りやごまかしの無いことです。この「三直」を心に留めて生きていきましょう。

◎健康登山の皆様へ 高尾山報投稿の御案内

御護摩受付所では、皆さまの「健康」に関する思いや思い出・習慣、又は「健康登山」を通じて経験した出来事などの、心温まるお話を聞かせて頂いています。

そこで、皆様のお話を多くの方々にお届けできますように、御護摩受付所に「投稿箱」を設置致しまして、皆様から投稿頂いたお話や作品を、『高尾山報』に掲載させて頂いております。

その他、おもしろい体験・変わった出来事・ポエム・俳句等どんなお話でも結構です。是非お聞かせください。御協力宜しくお願い致します。

※ 投稿頂きました作品は全て掲載できるよう努めますが、当山の判断で掲載しない場合もあります。また、多くの方々に投稿頂きました場合、掲載までお時間を頂く場合がございます。すことを御了承下さい。

『高尾山健康登山の証』のお勧め

年間約二百八十万の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、いまでは約五万人の方々が会員となられております。

期限はございませんので、御自分のペースで楽しみください。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すペーシがあり、終了したことを満行と言います。満行されますとお祝い膳として、精進料理の御接待や健康登山者限定の記念品などと交換もできます。



健康登山者投稿

健康登山と般若心経

八王子市 黒田 日出夫

私が登山をするようになったきっかけは、三十代の頃に山岳耐久レース等のトレーニング等として高尾山を登り始めたことでした。もうレースからは卒業しましたが、今でも毎日高尾山に登っております。

登山を始めた当時は、休日や夜間早朝に山頂までコースを問わずに登りました。定年退職後に高尾山健康登山を知り、二〇一二年から六年間をかけて百回の満行（二千百回の登山）を達成しました。その途中では、健康登山の皆様からの挨拶やお言葉に元気をもらい、明るく楽しく登ることが出来ました。

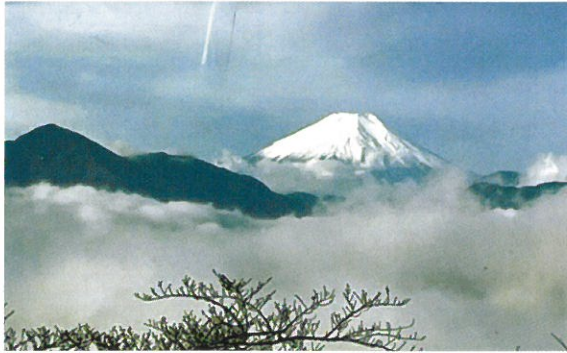
健康登山での思い出は「般若心経」が欠かせません。私が般若心経に触れたのは三十四歳の時でし

た。当時、社外研修にて鎌倉のお寺で合宿し、説法や法話聴聞、清掃に座禅、読経の修行をし、食事では毎回美味しい精進料理を頂き、その他は睡眠位と、箱詰め生活を送った経験があります。

その十年後、何気なく般若心経を思い浮かぶようになり、登山中に暗記すべく一念発起。

まずは層別手法で二百六十二文字の単語を使用回数順で覚えしました。第一位は「無」で二十一回、二位は「是」と「不」で九回、三位は「羅」で八回、四位は「空」・「故」・「波」の三種類で七回、十位は六十六文字が一回となり、使用文字数はトータル百十七種類で成り

立っているということが、登山中一年かけて分かりました。次に二百六十二文字の各行と各列の文字配置を選歴過ぎてやっと覚えしました。登山と般若心経は共に、「盲亀浮木の縁」と思っております。般若心経は、お釈迦様が十大弟子の一人である舍利子に向つて自然の法則や宇宙の真理を説いた経で、ありがたい御利益を授かれるお経です。今後も大切にお唱えして参ります。



雲海に浮かぶ富士山（撮影・筆者）

月下的沙漠

加藤まさを
(漢訳・荒井一雄)

中国と

厚木市 荒井一雄

遠方漠漠月下沙

印度の僧侶 お互いの言語と学び経と訳せり
月の沙漠をはるばると
旅の駱駝がゆきました

置鞍金銀去駱駝

金と銀との鞍置いて
二つならんでゆきました

金鞍王子銀鞍姫

さきの鞍には王子様
あとの鞍にはお姫様

兩人同乗穿白裳

乗った二人はおそろいの
白い上着を着てました

薬王院インスタグラム紹介

高尾山では、インスタグラムを用いて各種行事や四季が移ろいゆく風景を、写真や動画で御信徒様にお届けしております。

これからの様々な写真や動画を沢山アップしていくので是非ともフォローをお願い致します。

下記のQRコードかURLからアクセスができます。



TAKAOSAN_YAKUOIN

instagram.com/takaosan_yakuoin/

おはなし散歩道

ムササビ坊やと人形

栢市 木村 研

夏休みが終わって、高尾山が少しだけ静かになりました。

そんな夜のことです。 「うわーん。うわーん」

山中に響くような大声で誰かが泣いています。

「うるさいなあ。うるさくて眠れないじゃないか」

薬王院の阿形の仁王さまが、迷惑そうにいいました。

「おい。ムササビ。何とかしろ」

とうとう、吽形の仁王さまが、ムササビの坊やを呼びだしました。ムササビの坊やは、夜、山の中で遊び回っていますから、どこからか飛んできて、「どうしたの?」

と、ききました。

泣いていたのは、ストラップのウサギの人形です。目を真っ赤にして、泣きながらいいました。

「今日ね。お父さんとお母さんとなつちゃんとおで、高尾山に登ったんだ。その時、なつちゃんがボクも連れてってあげて、幼稚園バックにつけていたぼくをはずして、デイバックバックにつけて連れてきてくれたんだ。でも、くさがりが切れて、落つこちやつたんだ。それなのに、なつちゃんは、気がつかないで、帰っちゃったんだ」

「なあんだ。そんなことか、そんなら、ここで待ってたら、すぐに迎えにきてくれるよ」

と、ムササビの坊やがいました。

「だめだよ。早く帰らなくちゃ、明日、なつちゃんと一緒に幼稚園にいけないじゃないか」

ウサギの人形は、また泣きだしました。

「うるさいぞ。何とかしろ」

高尾山の天狗やカラス天狗の像が、じろりとムササビの坊やをにらみます。

「わかった、わかった。送ってやるからもう泣くなよ」

ムササビの坊やは、しようがないなあ、といいながら、ウサギの人形を背中に乗せて、高い木に登っていききました。そして、勢いよく飛びました。

ムササビの坊やが手足を大きく広げると、風に乗って、ひとつ飛び。一気に麓まで飛んでいききました。麓には、家がたくさんあります。

「ねえ。どれが、なつちゃんのうちなの?」

ムササビの坊やが聞くと、ウサギの人形は、「二番高いマンション」と、いいました。

「了解」

ムササビの坊やは、一番高いマンションのベランダにおりました。

ムササビの坊やとウサギの人形が、窓の外からのぞいてみると、なつちゃんが見えていました。

机の上には、幼稚園バックもおいてあります。

「あのバックと一緒に幼稚園にいくんたね?」

ムササビの坊やが聞くと、ウサギの人形は、嬉しそうにいいました。

「そうだよ」

「良かったなあ」

ムササビの坊やは、ウサギの人形と分かれて高尾山に帰っていききました。

空には、大きな丸い月が浮かんでいました。

やがて、秋風が吹くようになりきました。そして、高尾山のみじが紅葉するようになると、山は、また人がたくさん上ってくるようになりきました。

そんなある日のことです。高い木の上のうろの中です。寝ていた、ムササビの坊やが、外をのぞいてみると、たくさんの人が山に上ってききました。

ムササビのぼうやが、目をしよぼしよぼさせながら見ると、

「あつ」

と、目を丸くしました。たっさんの人の中に、デイバックにウサギのストラップをつけている子どもをみつけました。

つかの、ウサギの人形です。 「おつ。なつちゃんと一緒に上ってきたな」

ムササビの坊やは、嬉しくなって、

「おーい。もう、落つこちるなよー」

と、手を振りました。

(挿し絵・小出 茂)



御護摩修行のすすめ 皆様の諸願成就を祈願する

郵送御護摩の申し込み

当山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。御護摩修行とは、護摩木という特別な薪を大導師が御護摩の炎の中に投入し、あらゆる煩惱を焼き浄めるために行われます。そして、御信徒の皆様が祈りが御本尊に届けられ、皆様の諸願が成就するという修行であります。御護摩修行を行った方には、御護摩札が授与されます。

大切に持ち帰り頂き、お供物と共に自宅等に奉安礼拝して、一心に御宝号「南無飯縄大権現」とお唱え下さい。



古来より高尾山の御信徒は、自分のお願いが成就した時に感謝とお礼の意味を込めて、苗木を奉納するという習慣がありました。 今日でも、お杉苗奉納は続いており参道の大杉原には、お杉苗奉納をされた方々の芳名板が、板塀のように並んでおります。 毎年十二月十日までに、一万円以上を御奉納頂いた方のお名前を、翌年一年間掲示させて頂きます。

杉苗奉納

Tel 〇四二・六六六・一一一五 Fax 〇四二・六六四・一一九九 「郵送御護摩係」まで

七五三身上安全祈願

「七五三」とは、皆様方の可愛いお子様が、これから健康にすくすく育ちます様にと、身上安全の願いを込めて寺社にお参りするという行事です。高尾山でも御本尊・飯縄大権現様の御加護を願ひ、毎年多くのお子様がお参りに訪れております。十月・十一月の間、山上「御護摩受付所」にて、「七五三祝い子育て祈禱」を受け付けております。どうぞ皆様で御来山なされますよう、ご案内申し上げます。

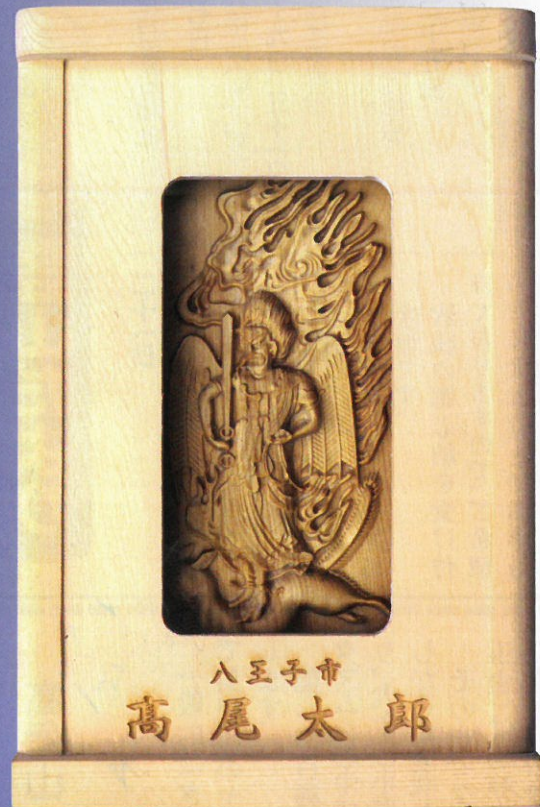
※十一月中の土・日・祝日には大変な混雑が予想されますので、時間に余裕を持って早めの御来山をお勧めしております。

新型コロナウイルスに対する安全対策

当山では、新型コロナウイルスの感染予防を図る為、受付や御札授与所における飛沫感染防止ビニールガードの設置、境内各所への消毒液設置、また職員のマスク着用などの対策を実施しております。

御来山の皆様方にはお手数をお掛けしますが、当日ご自宅を出る前に検温して頂き、体調が優れない時や、不安な時は御来山をお控え下さいませようお願いします。

尚、最新の情報や行事の実施等につきましては、薬王院のホームページをご覧ください。お電話にてお問い合わせください。



高さ13.5センチ 横幅9センチ

御納佛冥加料 一体 五萬円

御本尊・飯縄大権現様との御縁を深める

大本堂内結縁「内陣御納佛」奉安のご案内

高尾山では、御信徒様と高尾山御本尊・飯縄大権現様との益々の御縁が結ばれますように、大本堂内陣に御本尊様の御魂を宿した「内陣御納佛」の奉安を皆様にお勧め申し上げます。

お申し込みになりますと、御納佛との尊い結縁のしるしとしてご芳名を刻み、大本堂内陣壁面に奉安され、幾久しくご繁栄を祈念するものであります。

また、御納佛が壁面に満たされますと、その都度、内陣格子奥に移し大切に安置されるものであります。

高尾山内八十八大師巡拝のご案内

二つのグループに分け、途中(山上十二丁自茶屋前第十七番札所)で合流し、一緒に巡拝致します。

A、不動院から蛇滝を経由して薬王院まで歩く
B、ケーブルカーを利用する
(蛇滝周辺のお大師様は巡拝できません。また、ケーブル代金は自己負担になります。)

日 程 十月十一日(火)

行 程 山麓不動院↓蛇滝↓仏舍利塔
↓大本堂(護摩修行)↓坊入(昼食)
↓下山(一号路)↓不動院着(法楽)

参加費 五千円(昼食代、保険料含む)

集合場所 山麓不動院(八時半集合)

申込方法 ハガキに郵便番号、住所、氏名、生年月日、性別、電話番号を明記の上、左記までお申込み下さい。

締め切り 九月三十日(金)

〒一九三二一八六八六
八王子市高尾町二七七
大本山高尾山薬王院 八十八大師係
お送り致します。

*申し込み締切り後、請書(行程表・持ち物等)をお送り致します。

*尚、新型コロナウイルス感染症の状況により行程等に変更がある場合があります。



第二百十回 高尾山信徒峰中修行会

十月八日(土)

来る十月八日(土)、信徒峰中修行会を、当日未明から夕方までの日帰り行程で開催致します。

夜明け前の徹かで靈気に満ちた高尾山で回峰行を行い、薬王院で朝勤行や諸堂参拝、当山貫首による晋山記念法話、また、有喜苑での柴燈大護摩供に参加してみませんか。

ケーブルカーは使用せず、山麓から六号路にて練行を行います。適宜休憩を設けますが、暗く舗装されていない山道を、一定のペースで二時間程度歩く自信のある方のみ御参加下さい。

また、集合時間は厳守となります。遅刻の場合には対応致しかねますので、その旨了承頂きます。

修行会ではマスクの着用等感染対策を行いますので、参加者の皆様にもご協力願います。

※請書は締め切り後に発送致します。

※練行は夜明け前の暗い六号路となります。舗装されていない登山道で御座いますので、足腰に自信のある方のみ御参加ください。

※琵琶滝には入滝しません。

※当日の天候や状況によって行程変更や中止となる場合がございます。

行 程

2:00	高尾山麓不動院 集合・受付
2:30	回峰行 六号路、途中琵琶滝で法楽
4:30	山頂到着、御来光法楽
5:30	朝勤行(大本堂)
6:30	休憩
7:40	朝食(大本坊)
9:00	佐藤貫首晋山記念法話
10:00	諸堂参拝
11:45	昼食(大本坊)
13:00	柴燈大護摩供 於・有喜苑仏舍利塔前
14:30	不動院
15:00	解散

お申し込みについて

申込方法は左記いずれかの方法とし、お電話での申込は承りかねます。

1 ハガキに必要事項(郵便番号・住所・氏名とふりがな・性別・生年月日・当日連絡のつく携帯電話番号・緊急連絡先(統柄)・アレルギ)を明記してお送り下さい。

2 左記のQRコードからお申込み下さい。

●お車で越えしの際には山麓祈禱殿駐車場をご利用頂けます。その他、ご相談のある方は時間内(九時~十六時迄)に信徒峰中修行会係までご連絡下さい。



宛 先 〒一九三二一八六八六
八王子市高尾町二七七
高尾山薬王院
信徒峰中修行会係宛

電 話 ○四二一六六一二二五

募集期間 九月十六日~三十日
※十五日以前の申込は無効とさせていただきます

参加費 一万円 *保険料含

定 員 二十名(男女不問)
*体力に自信のある二十歳以上定員となり次第締め切り
ます。ホームページでご確認下さい。

集合場所 高尾山麓不動院
八日午前二時

服 装 運動着

持 参 品 運動靴(登山靴可)
雨具(カッパ、ポンチョ)
マスク(予備含)、
タオル、
リュックサック、
ヘッドライト、
筆記用具



高尾山報助成金志納者
御芳名(順不同・敬称略)

伊勢崎市 佐々木 晋介
八王子市 天野 章雄
入間市 (有)健信工業
足立区 鈴木 智恵子
練馬区 小泉 由利子
羽村市 島津 彰仁
東松山市 根峯 裕基
熊谷市 大久保 智夫
世田谷区 広田 俊道
新座市 彰山 粧麗
八王子市 新井 茂二
川口市 増田 幸次郎
川口市 増田 道子
練馬区 稲毛 英子
富里市 森 照森
所沢市 仲 享子
八王子市 馬場 忠平
小平市 関 道雄
八王子市 石井 忠明
比企郡 戸口 朋幸
高尾山健康登山者一同



登山だより

十月行事日程

一日〜七日

聖天秘供(聖天堂)

七日、十九日、三十二日

弁天様御縁日

四日

中興俊源大徳忌

四日、二十五日

御詠歌勉強会

八日

仏舍利詣り(仏舍利塔)

十七日

高尾山秋季大祭

二十二日

月例写真会

二十八日

(十三時山麓不動院)

奥之院開扉供養

(十時奥之院)

二十一日

飯糰様御縁日

神徳報謝百味飲食供

(九時大本堂)

○御本尊様の日々の御

加護に感謝し、百味のご

供物を捧げて供養する

法要です。

皆様の御志納を受け付

けておりますので、ご希望

の方は大本堂までお申し

出下さい。

尚、法要終了後に百味の

お札を授与致します。

御志納金 一口三千円以上

三十日

高尾山とんとんむかし

「語り部の会」

(十二時半山麓不動院)

三十一日

滝じまい

高尾山の昆虫

クロホシタマムシ

一般的にタマムシと言えば大型で美麗種のヤマトタマムシを連想します。

但し二百種以上知られる日本産

タマムシの中で大型種は一握りであ

り、大半は小型が色彩もタマムシら

しからぬ地味な種が多々存在します。

その中でクロホシタマムシ(黒屋

玉虫)は10mm内外の大きさながら、金属光沢が強

く青緑色の地に赤橙色が浮かび、黒藍色の斑紋が

散りばめられる美しいタマムシです。

普通によく見かけるといふ感じはなく局地的な

感はありますが、クヌギやクリ等の伐採木が置かれ

ている場所ではかなりの数の個体が確認できます。

小型種ですので初めのうちは何が飛んでいるの

か気がつかない中、産卵のため材に静止した姿を

見てタマムシであることに気づき、歓声を上げた

くなります。

本種の近似種にマスタクロホシタマムシがいて極

めてよく似ていますが、マスタクロホシタマは黒藍

色の斑紋の数が少なく、小盾板がハート型、クロホ

シタマは台形であることで区別が付きま

す。

ヤマトタマムシや高尾山に多く見られる美麗種

アオタマムシのような大型種の迫力はありません

が、小型種でも秀逸なタマムシがいることを本種

が実証しています。

(文松島 孝 撮影上村 雅昭・松島 孝)



155

◆休載のお知らせ

波多野重雄先生による連載「折り折りの記」は、都合により休載とさせて頂きます。

高尾山報助成金

御志納のお願い

当山では、大護摩修行等により御縁を結ばれた御信徒様に高尾山報を送っております。

引き続きのご愛読されますよう、皆様方の助成金御志納をお願い申し上げます。



高尾山薬王院ホームページ
<https://www.takaosan.or.jp>

下記のQRコードから高尾山薬王院のホームページにアクセスできます



発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号 193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人 犬山 秀康
編集人 菅井 倫浩
印刷 ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円